

## 学習内容報告書 フォーマット

学校名	福島県南会津郡只見町立明和小学校
授業者	第6学年担任

### 1. 単元計画

実施した活動内容に基づきご記入ください。

#### 1-1. 単元名

只見の川から海へ

#### 1-2. 学年

第6学年

#### 1-3. 教科（単元を実施する教科を全てお書きください）

総合的な学習の時間（社会科・理科・国語科・算数科・家庭科等と教科横断的な学び）

#### 1-4. 単元の概要

子どもたちの疑問から地域の二つの川の水質調査を行い、結果を、「川の場所」「ごみ」「川の長さ」と多様な視点で比較し、二つの川の水質が異なる原因を考えた。また川の場所について考える際に、地図を使って調査した場所からさらに上流の様子を見たところ、川の周りの家の数や森林の様子の違いに着目し、周囲の環境が大きく影響していることに気付くことができた。下流の方がもっとごみが多くなるという考察を確かめるため、伊南川をたどって実際に最終ゴール地点である日本海までいく活動を行った。その活動の中で、伊南川が途中で只見川と合流する様子や、新潟市に入り街が広がっている様子、海岸にたくさんのごみが落ちている様子を見ることができた。また、ごみ拾いを行う中で、伊南川や黒谷川でのごみと比べてたくさんのごみが落ちていることや、外国のごみが流れ着いていることなどに気付くことができた。そこで地図をもとにごみの流れを確認することを通して、川と海のつながりをより確かなものとさせ、自分たちの生活の仕方が海洋汚染や海辺の人々の生活に関わっていることに気付き、意識を変えるきっかけとなった。

#### 1-5. 単元設定の理由・ねらい

第4学年、第5学年の学びを振り返る中で、各学年での学びで感じたことのずれに気付き、「本当に伊南川はきれいなのか」という疑問が生まれ、もう一度伊南川を調査し直したいという多くの声や町内の黒谷川と比べてみたいという子どもたちの声から、疑問を解決すべく伊南川と黒谷川の水質調査とごみ調査を行うことにした。伊南川と黒谷川のごみがどのようにして海へ流れついているのか地図をたどり、ダム役割や、ごみの量が異なる原因を学びや生活体験と関連付けて考察することを通して、疑問点や不明瞭な点に気付くことで、詳しく調べたいという思いを高めることができる授業を目指した。

#### 1-6. 育みたい資質や能力、態度

- 地域の川と海のつながりに関する探求的な学習の過程において、二つの位置関係や周囲の環境、ごみなどの関係性から環境の保全の必要性について気付く力（知識及び技能）
- 水質調査やごみの分別の結果から問いを見出し、その解決に向けて仮説を立てたり、いくつかの調査結果を関連付けて考えたりしたことを根拠にして表現することができる力（思考力・判断力・表現力等）

- 只見町の川と海の関係に関わる探求的な学習に主体的・協同的に取り組むとともに、人と自然のつながりを捉えながら、持続可能な社会を実現するための行動の仕方を考え、自ら社会に参画しようとする力  
(学びに向かう力・人間性等)

1-7. 単元の展開 (全22時間)

時数	学習活動・主な内容	教師の指導 / 主な評価 外部連携 / 使用教材等
1 ～ 2	○ 第5学園までの地域学習について振り返り、今年はどうよう学習課題について追究していきたいか考える。	○ 学習してきたことや生活経験を想起させ、自分たちの問いを基に学習課題を設定する。
3 ～ 8	○ 身近な川の水質調査を行い、地域の川の実態を把握する。  ○ 調査で得た結果から、地域の川にはどんな問題があるのか考え合う。	○ 只見町の川はきれいだと言われているが、実際はどうなのか、自分たちで調べる方法を考え、実際に川へ行って五感を使って、また、客観的な資料を基に考える。  ○ 今までの学びとの結果や自分たちの予想とのズレから、学ぶべき課題を共有する。
9 ～ 18	○ 新たな課題について追究する。	○ 「伊南川の旅」として校外学習を設定し、下流の状態について実態把握する。  ○ 「伊南川の旅」で得た結果について 多様な視点で考える活動を通して、自分たち山間部に住む人々の生活が海洋に影響を及ぼすことに気付けるようにする。
19 ～ 22	○ 「只見の川から海へ」の学習のまとめとして、全国海洋サミットや町の ESD・海洋教育成果発表会で自分たちの提案を行う。	○ 国語の学習を生かし、相手意識をもって自分たちが伝えたいことをまとめ、資料や写真を効果的に使いながら説得力ある提案をする。

## 2. 学習活動の実際

### 2-1. 単元における位置づけ

単元 22 時間中の 16 時間目

※例：単元 10 時間中の 2 時間目 / 単元 15 時間中の 4, 5 時間目

### 2-2. 本時の目標

只見と日本海のごみの量の変化について地図をたどる中で、ダムにせき止められているごみの存在や、同じ日本海でもごみの量が異なることに気づき、ダムの働きやごみの量の変化について学びや生活体験と関連づけて考察することを通して、疑問点や不明瞭な点を明らかにすることで、新たな問いをもつことができる。

### 2-3. 本時の展開

主な学習活動 / 反応	教師の指導・支援 / 評価の視点 (方法)
<p>1 只見の川と日本海のごみの種類や量が異なる原因について振り返る。</p> <p>2 本時のめあてをつかむ。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>川から海へ流れていく中で、ごみの量はどのように変化していくのか。</p> </div>	<p>○ これまでの活動の様子や学習の流れを掲示しておくことにより展開部分では今までの学びをもとに根拠付けて話し合いができるようにした。</p> <p>○ 振り返りの中で、「ごみは下流に行くにつれてどんどん堆積される」「川が合わさるからごみが増えていく」という言葉が出ると予想される。「ごみは下流に行くにつれて徐々に増えるということ？」と問うことで、急激に増える場所がある(工事しているところ/新潟市に入ったところなど)という思いを引き出し、本時のめあてにつなげた。</p>
<p>3 地図をたどりながらごみの流れについて話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・二つの川が合わさったからごみの量も倍になると思う。</li> <li>・途中工事していたから出るごみの量が増えていると思う。</li> <li>・ダムにはごみがたまっていた。→ダムの下にはごみは流れていないのかもしれない。</li> <li>・新潟の街が出てきて工場や建物も増えたからごみの量も多くなると思う。</li> <li>・海は外国ともつながっているから、外国から流れてきたものも混ざってごみの量も多くなると思う。</li> <li>・去年行った日本海の海岸の様子と異なる。→季節が違うから？川の河口から遠いから？誰かがごみを拾ってくれている？</li> </ul>	<p>○ 地図を活用することで、只見と日本海を点で捉えていたものを、つながりをもって見ることができ、自分事として捉えられるようにした。</p> <p>○ ダムがあることによってごみが下に流れていかないという話し合いの際に、「なんのために網が張ってあるの」「このごみってどうしているの」と問うことで、様々な考察を生み出しつつ、明らかではない点に気付かせた。</p> <p>○ ごみの量の変化について話す際には、伊南川と黒谷川の調査を想起させたり、他教科とつながりをもって話せた場合は価値付けたりすることで、今までの学びを基に根拠をもって話せるようにした。</p> <p>○ 日本海は汚れているというイメージを強くもっている子どもたちに、昨年度行った日本海の様子の写真を提示する。そのことにより、同じ日本海でも違いがあることに気付かせ、なぜ違うのかという問いから、再度、川とのつながりを認識させたり、環境保全に努めている人がいるかもしれないということに気付かせたりした。</p>

<p>4 本時の学習を振り返り、疑問点から新たな問いをもつ。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ダムのごみを防ぐネットは何のためにあるのか。</li> <li>・工事をしているときにごみを出さない工夫はしているのか。</li> <li>・新潟の海辺ではごみ拾い活動をしているのだろうか。</li> </ul>	<p>○ 調べたいことを共有する中で、海辺のごみ拾い活動というキーワードが出た際に、「只見でもごみ拾い活動ってあるのかな」と問うことで、地域の視点に戻り、より自分事として考えられるようにした。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>地図をたどる中で見えてきたダムの役割やごみの量の変化などに関する疑問を基に、より詳しく調べたいという思いを高めることができたか。(発言・ワークシート)</p> </div>
---	---

### 3. 今回の活動の自己評価

<p>○ 伊南川や黒谷川での水質調査やごみ調査の結果や考察など、学びの足跡をいつでも見返せるように掲示してきた。大きな地図を準備し、一目で伊南川～日本海までの流れがわかるような工夫をした。すると、「伊南川や黒谷川の周辺は山が多かったけれど海へ近づく建物が増えるからその分ごみが増えると思う」「ここで川が合流するからごみの量も合わせって増えると思う」と今までの学びと関連付けながら根拠をもって話すことができた。自分たちの探求的な学びによって地域の自然環境が海洋の自然環境に影響があることを理解することにつながった。</p> <p>○ 偏った考えを抱かせないようにするため、5年生の八十里越え体験で行った日本海の写真を提示したり、外国の表示が添付されているごみの写真を提示したりすることにより、新たな問いを生み、授業の中でさらに広がりをもって考えさせることができた。それがきっかけでごみが集まる原因について深く考えることができた。海洋の問題は日本の問題だけでなく世界の問題であることに気付くことができた。</p> <p>○ 本時は「川の位置」「周辺の環境」「川幅」など様々な視点でごみの量の変化を捉えることをねらいとしていたため、多様な視点に気付かせるための問い返しを繰り返し行った。そうすることによって「海流」「体積」「比例」など他教科で学習した内容と関連付けて思考し、明確な根拠をもって学び合うことができた。また、あらかじめ伊南川と黒谷川を比較させる際に様々な視点をもって学習したことが、今回も多様な視点で比較することができたと考える。教科横断的な学びが深い学びを実現させることにつながることを実感し、教師の意識が大切と再確認した。</p> <p>○ 本時以降の学習では、海洋教育全国サミットや町の ESD・海洋教育成果発表会で広く発信するために、自分たちが考えたことについて相手にわかりやすく効果的に伝えることができるようにと、まとめを行った。山間部に住む自分たちの生活が下流に住む人々の生活や海洋に大きな影響があること、自分たちの行動を変えなければ地球の問題を解決できないという考えに至り、地球に住む人間として意識を高めることができた。</p>
--

### 4. 今後の課題

<p>● 子どもたちの主体的な学びを実現するためには、学ぶ価値のある地域素材をどのように導入時に提示するか工夫し、子どもたち自身が「調べたい」「考えたい」と思う課題を設定することが必要不可欠と感じた。また、課題追究の段階でより価値の高い学びに導いていくためには教師が教科横断的な視点を持ち、地域素材を生かしてどんな子どもたちの姿を目指していくのか、育みたい資質や能力を明確に描く必要がある。そして、学ぶ子どもたちの姿を丁寧に見取り、思考の流れを把握しながら実現したい姿へと導いていく手立てを工夫していく必要があると考える。</p>
---

## 5. 本学習内容報告書活用にあたっての留意点

森林が豊かな山間部における海洋教育の在り方の一つと理解していただけるとありがたい。山間部から「海」を見直す、また、「海」から山間部に住む自分たちの姿を見つめ直す学習の一つである。その学びから、自分たちは地球上の一員であり、地球を存続させていくためには自分たちの意識や行動を変えていく必要があることに気付かせる学習として参考となればと考える。

※実施した單元ごとに作成してください。

※写真、画像、図表等の使用可。必要に応じて記入欄やページ数を増やしても構いません。

※基本レイアウト

フォント：MS 明朝，10.5 ポイント / マージン：上下端 20mm，左右端 16mm

※ファイル名は「学習内容報告書\_学校名」とし、複数提出する場合は学校名の後に数字を記載してください。

例：学習内容報告書\_海洋市立パイオニア小学校 1

※年間指導計画（年間の指導計画における単元の位置づけが分かる資料）があれば別添資料として提出してください。フォーマットの指定はありません。